

# 第四步 2-3

## 学び・心・絆を支える医教連携コーディネーターの働き

～学生・保護者・医療・学校のハブに。さらに支援ノウハウをガイドブックに残す～

京都市立桃陽総合支援学校

### はじめに

京都市立桃陽総合支援学校は、本校、5分教室、訪問教育の3つの教育部門を持ち、各教育部門に小学部、中学部を設置しています。高等部の設置はありません。分教室を設置する5つの病院には、京都大学医学部附属病院、京都府立医科大学附属病院の2つの小児がん拠点病院があります。そのため、京都市以外からの児童生徒の入院患者も多く、高校生入院もあります。

高等部の設置がない桃陽総合支援学校では、センター的機能を活用し、在籍高校と連携する中で入院高校生の学習支援に取り組んできました。在籍高校とつながり続けることは、入院療養する高校生の心理的支援に有効です。

教育制度の見直しによる要件緩和が進む中、京都市立高校以外の高校へと取組は広がり、新型コロナウイルス感染症拡大により、令和2年度から大幅に支援が増えました。

桃陽では6年間の取組の総括として、がん等で入院療養することとなった高校生が、治療と高校生活を両立させるための支援についてガイドブックを作成しました。

そのガイドブックの概要と、入院療養する高校生の学習支援の事例を紹介します。

	H29	H30	R元	R2	R3	R4
入院療養高校生教育相談	7	13	18	11	19	13
授業配信：出席認定	1	1	4	8	13	10
授業配信：配信のみ	2	1	1	0	2	0
配信認めず	4	3	0	0	0	0
その他（通訳、他府県特支、ケース会議）	4	8	13	3	3	3

### 「長期入院療養中の高校生の学習継続に

### 関するガイドブック（※1）」

#### （1）概要

高校生時代は、先生や友だちとの出会いを通して、人間としての在り方や生き方を考え模索する大切な時期です。入院療養中などで登校できなくてもクラスメイトと学習が続けられる環境を整えることは、成長発達の面からも大切です。在籍する高校とつながり続けることは、入院療養する高校生の心理的な支援に有効です。

本ガイドブックでは、高校生と保護者の方々、高校生が在籍する高等学校の教職員の方々、治療に当たる医療従事者の方々に向けて、特別支援学校（病弱）のセンター的機能の活用を中心に、どのような相談場所があるか、どのような支援が必要か、支援を進めるためには、どのような連携を図っていく必要があるか等についてまとめました。

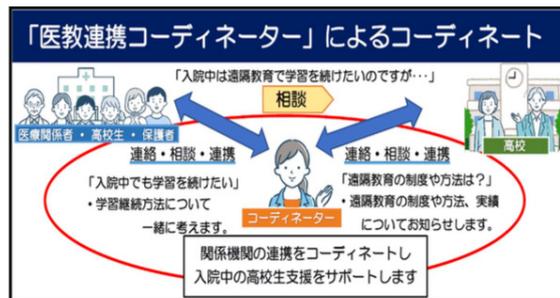
見開き1ページを基本とし、体験談や関係者の声、実際の資料や映像、よくある質問をQ & A形式で掲載しています。

※1 桃陽総合支援学校ホームページよりダウンロード可能



## (2) 関係機関の連携

入院療養する高校生の学習支援を進めるとき、医療側と高校側が情報を共有し、生徒や保護者の願いに寄り添い、連携を図ることが必要です。また、入院療養する高校生の学校や学習に関する相談については、教育関係者が担当することが有効です。京都市では桃陽総合支援学校の特別支援教育コーディネーターに医教連携コーディネーターの役割付を行いました。医療と教育の連携を進めるために、双方からの情報を集め、高校生の希望に寄り添い、できることとできないことを整理していく場を設けることがコーディネーターの大切な役割です。コーディネーターには関係者に寄り添い、できる方法を考える資質が求められます。立させるための支援についてガイドブックを作成しました。そのガイドブックの概要と、入院療養する高校生の学習支援の事例を紹介します。

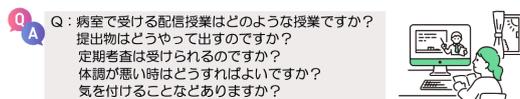


## (3) 入院療養中の学習継続と学習支援

突然の入院となった高校生と保護者は病気治療への大きな不安を抱きます。そして次に、高校生活継続について大きな不安を抱きます。入院期間中の学習継続については主治医に確認し、可能であれば学習を続けていくことが、高校生の大きな心理的支援につながります。

「入院して治療を受ける」という状況は、高校側では予測のつかない状況です。しかし、医療関係者と高校が治療計画と学習指導計画を共有する中で、学習支援を進めることができます。多くの高校は、結果として配信授業での支援について肯定的でありました。配信授業を実施した高校は次のような感想を述べています。

「まずは治療が第一で、あまり負担をかけるべきではないのでは…という思いもあったが、学校とつながることが病気を克服する上で非常に大きな支えになるのだと知った。また、この取組は教職員やサポートする生徒、学校全体に好影響を与えていると感じた。学校全体が優しくなった。」(京都市立高校)「退院の見込みが卒業の時期だったので、入試を受けられるか不安だった。主治医とのカンファレンスで、治療計画を入試日程に合わせるなど配慮をしていたが、生徒は無事に卒業、進学することができた。」(京都私立高校)入院療養中でも高校とつながり続けたいと願う高校生にとって、教育は治療の大きなエネルギーとなります。多くの高校はその成果を実感していました。



A: クラスの授業を病室で視聴する同時双方向型の配信授業の事例があります。

- 出席確認や先生からの質問に答えたり、クラスメイトとの意見交換等、双方向の授業に参加して出席が認められます。
- 提出物などは、「郵送で高校に送る」「PDFで高校に送信する」などの方法があります。高校の先生に相談するとよいでしょう。
- 高校によって異なりますが、定期考査も遠隔教育と同様に、クラスとつないで実施する方法もあります。行事予定などは、主治医の先生や看護師さんに知らせ、治療や検査の予定と重なっていないか確認をしておきましょう。  
👉 具体的な方法はP9「定期考査実施例」参照

【気を付けること】

- ◆治療や検査の予定は高校の先生と共有し、授業視聴の予定を立てましょう。
- ◆体調が悪く、授業を受けられない日等の連絡方法を、学校の先生と相談しておきましょう。

病院側で治療にあたる主治医は、配信授業を受ける高校生について次のような感想を述べています。

「同時双方向遠隔教育の導入前は、病気療養を必要とする高校生は、勉強を一人でやる必要があり、とすれば目標を見失ってしまい、病院での時間を持て余してしまう様子が見受けられた。しかし、遠隔教育導入後は、病気療養しながらでもクラスメイトと一緒に勉強し、高校生として過ごすことができるようになり、治療にも前向きに取り組めるようになった。治療と勉強を両立しながら、遠隔授業を受ける高校生たちには本当に頭が下がる思いである。」

「院内学級による小中学生への学習支援に比べ、高校生への学習支援は遅れているのが実情であった。医教連携コーディネーターによる在籍高校との連携により、遠隔授業さらには単位認定が可能となったことは実に大きな前進である。遠隔とはいえ、同級生とともに授業や試験をうけ、進級、進学していくことは、長い治療の中にあつて大きな励みとなっていることは医療者側へもひしひしと伝わってくる。また、そのような患者さんを目の当たりにすることは医療者にとっても大きな喜びとなっている。今後、全ての高校生へスムーズな学習支援がなされるよう、サポートを続けていきたい。」主治医の思いと高校の不安は、両者が連携することで解決できることが多くあります。医療と教育がつながる状況作りは、各地域の状況により異なるでしょう。各地域の状況に応じた医療と教育の連携を図る組織作りが必要です。

## 配信授業に支えられて

入院中であっても、教室の授業を配信で受け、出席認定、単位認定につながることは高校生たちの強い願いです。そして遠隔教育には、入院する高校生の感謝の気持ちや、厳しい治療に向き合う勇気を育み、高校側の生徒や教師の思いやりの心を育む力がありません。立させるための支援についてガイドブックを作成しました。

そのガイドブックの概要と、入院療養する高校生の学習支援の事例を紹介します。

### 事例1 「病室を出て行く場所があることが励みだったAさん」

平成26年、院内受験で高校進学をしたAさんは「高校生になったら勉強できる場所がない。私も勉強したい。」と分教室の先生に相談しました。高等部がない桃陽は地域支援に位置付け、病院から学習室の提供を受け、大学院生の協力を得て高校生学習会を開始しました。専門性の高い大学生の話に魅力を感じるAさんは、主治医の許可を得て、週1回の学習会を2回、3回と増やしました。残念ながら、高校に通うことができないまま逝去されたAさんについて、お母様は「病室を出て、行くところがあって、それが子どもの励みになっていた。」とおっしゃいました。病室にいと「患者」でも、学習室に来室するときは「高校生」です。入院していても高校生としてのアイデンティティを確立できる環境を整えることは入院中の心理的支援につながります。



↑ 学習会の様子

### 事例2 「高校の理解と支援により、クラスメイトとの絆を育んだBさん」

配信授業に取り組もうと考える高校の一番のハードルは、「できない理由を見つける」現場の先生だと、多くの高校の感想があります。そのような高校の先生に、病院で授業を受けるBさんの様子や医療側の考えを伝える機会がありました。病院でのBさんの様子を知ることで、配信授業に反対し、疑問を訴えていた先生方の理解が深まり、できる限りの支援を行いたいという声があがりました。各教科の先生が、Bさんへの学習支援について、特別なことをするのではなく、できたところを評価しました。それはBさんの自信につながりました。

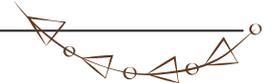
入学式から配信授業を受けていたBさんは、2学期に復学。初めてリアルに会うクラスメイトと、「久しぶり!!」と声をかけあっていました。入院していても、定期考査を受け、課題を提出しクラスメイトと同じ時間を過ごすことができた配信授業を通して、高校生たちは、クラスメイトの絆を育んでいました。

### 事例3 「学校生活の配信が退院後の登校意欲につながったCさん」

院内受験で進学したCさんは、当時必要だった「病院側に当該高校の教員を配置する」という具体的な要件を満たすことができず、留年を決意しました。Cさんの支援について、新入生だったこともあり、「登校時の学校の様子」「校舎見学」「文化祭」「体育祭」など学校生活の配信を試みました。病室側では桃陽が視聴を支援しました。退院が近づいたある日、「1年生2回やってもいいから、高校に行ってみよう。」とCさんが話しました。Cさんの希望で、高校と繋ぎ、クラスメイトや担任の先生と「よろしく!!」と手をふって自己紹介をしました。配信により学校の様子を身近に感じたことで、復学への安心感と期待を抱くことができたCさんは、退院後、元気に登校しました。

## 事例4 「高校の時間割に合わせた配信授業を視聴することで、入院生活のリズムが整ったDさん」

私立高校に在籍したDさんは、具体的要件（当時）が整わず、オンデマンドで学習支援を受けることとなりました。録画授業の視聴ではなく、録画しながら、一方向で配信される授業を視聴するという配信授業でありました。そのため、Dさんはクラスメイトと同じ時間を共有することができました。録画授業も用意されていましたが、Dさんは「自分で録画授業の視聴時間を設定することは少し難しかった。双方向でなくても、クラスの授業を同時に受けること、授業の遅れがなかったし、何よりも入院中の生活リズムが整いました。復学しても学習についていきやすかった。」と感想を述べています。本事例では、Dさんの出席確認について、担当看護師が確認し、出席簿にサインするという方法が工夫されました。



## 事例5 「通信制高校のスクーリングを配信で受けることができたEさん」

通信制高校に在籍するEさんは、突然の発病で、2年生の春から8ヶ月間入院することとなりました。新型コロナウイルス感染症が拡大する中での入院でした。Eさんは厳しい治療に向き合いながらも、医学部を受験するという目標に向けて、熱心に勉強を続けていました。課題は、面接指導（スクーリング）でした。制度上、面接指導を免除する時間数は、10分の8を超えることができないため、残りの10分の2を同時双方向型配信授業で認めることができなければ、Eさんは原級留置となります。Eさんの面接指導について、高校から相談を受けた自治体教育委員会は、文部科学省に相談を進めました。文部科学省からは「生徒の不利益にならないように個別に弾力的に対応していただいて構わない」という回答でした。Eさんの面接指導はコロナ禍における特例という形で、配信授業での実施が認められました。

通信制高校においては、面接指導は必ず受けなければなりません。しかし、退院後、「授業を受ける場所」「感染症への配慮」「自宅療養の必要性」など、決められた時間や場所で面接指導を受けることができない場合もあります。事例により対応は異なりますが、通信制高校の生徒が入院した場合、面接指導のサポートは課題であり、配慮が必要です。

## 事例6 「ひとりだったらここまで勉強できなかったと語るFさん」

私立高校に通うFさんは、入退院や転院を繰り返しながら、先生や友達に支えられ配信授業で高校生活を送ることができました。Fさんを支えたお母さんによれば、中学生で発症、入院中は院内学級で学習できましたが、退院して原籍中学校に復学した時、体力や免疫力がないため、欠席や保健室登校が多くなり、学習面での不安が大きかったそうです。高校に進学し、配信授業で出席も認められるようになり、Fさんは随分前向きになりました。配信授業にはアバターロボットが使われまし。振り向けば友達の様子が変わり、クラスから取り残された感じはなかったそうです。「一人だったらここまで勉強できなかった。配信授業でクラスメイトと繋がっていたから、ここまで勉強できた」とFさんは話す。学校では配信機材がFさんとして受け入れられていました。体育の授業中、ボールが配信機材に当たってしまった時、先生がクラスメイトに「お前ら、命懸けでFを守らんかい！」と生徒たちに声をかけました。Fさんはとても嬉しかったそうです。入院していても社会から取り残されず、頑張れば頑張っただけ評価してもらえる、高校生として当たり前のことが実現することが、生きていく自信につながります。

